あとがき

息子の死から7年になりました。

この間、本人の祖父と祖母の4人のうち3人が他界し、1人になってしまいました。亡くなった祖父も祖母も天国では先輩である孫と再会し、頼り甲斐のある孫と一緒で安心していることでしょう。

著名人が病から復帰した話を耳にします。病から復帰したある学者の方は、「二流、三流の大学病院の医師より、この病についての知識は自分のほうが上だ」とおっしゃっています。それだけ調べ上げた結果の言葉と思います。

また、ある作家の方は、自分の病の治療法について医師との考え方が合わなければ、納得するまで話し合い、それでも納得できなければ次の病院へ転院する、そして納得するまで病と向き合い、現在は病を克服されています。

私たちは息子の体力を過信し、そして、大学病院はチーム医療で最先端の技術があると思い込み、担当医に任せきりにしてしまいました。

いろいろと相談に乗ってくださったベテラン医師は、大学病院に嫌気がさし、現在は救急病院の院長をなさっています。その方が「大学病院は『白い巨塔』に描かれているとおりだ」と話していました。

ある時、リメイクされた「白い巨塔」がテレビで放映されていました。その内容は、私たちのことのように思われました。

手術前に他に病巣があっても医師個人の思い込みで診断されず、手術日は病院の都合により変更はされない。

手術は成功したが他の病巣によって急変し亡くなる。真実は開示されず、何人もの弁護士に相談するが、手術ミス、薬の投与ミス以外での訴訟はむずかしいと判断された。

ここまでは、私たちとまったく同じです。

「白い巨塔」では、告訴し病院内の医師が証言し勝訴となっていくのですが、これはまず現実には、ほとんどあり得ません。

私たちだけでなく家族を亡くした者だれもが、このような状況になった時、なぜ亡くなることになったか、真実が知りたいのです。医師は「神」ではありません。間違いがあっても仕方ないのです。真実を知りたいのです。

息子は、再入院中、血小板の低下が続きました。しかし、原因不明とされ、輸血以外の治療はされず、肉体的苦痛によって精神的に大変な不安定になりました。

急変時は、集中治療を緊急に施行したいと担当医から言われましたが、なぜか4時間も一般病室に置かれたままで治療されず、苦しみ続けました。安らかとは言えない最期でした。

病院の回答はないのですが、「症状詳記」には、「緊急に集中治療を開始した」と記載されています。今ではこの一点だけでも真実を知りたいと思っています。相談にのっていただいた3人の医師、そして息子の担当医を管理する病院側の医師にこのことを質問しても集中治療を緊急に施行しなかった理由が分からないとの見解でした。

息子の死の解明はできませんでしたが、親としてできる限りの行動はしたつもりです。

担当医に任せきりにしてはいけないこと、セカンドオピニオンがいかに大切なのかを多くの方々にこの本を通して知っていただきたいと願っております。また、私たち家族も一区切りしたいとの思いで刊行に踏み切りました。

「人間は2度死ぬ」と言われています。本当の死と、死を忘れられた時の死。若くして亡くなり、さぞかし本人は無念ではありましょうが、この本によって2度目の死は防ぐことができたのではないかと自負しております。

推薦文をくださった早稲田大学法務研究科教授和田仁孝先生は、厚労省の「死因究明に資する死亡時画像診断の活用に関する検討会」の委員として、また、医療メディエーター協会を設立なさっています。

和田先生は何度も私たちの相談に乗ってくださいました。そして、病院側へ「ADR」を開くよう助言をしてくださり、自らも同席してくださいました。

妻を医療過誤で亡くされ、『断罪された「医療事故隠し」』（あけび書房刊）を出版された永井裕之さんは、「医療を守る市民の会」の代表で、「医療版事故調」をつくる法案に尽力され、2014年に国会提出されることとなりました。

永井さんは実体験から病院への対応を教えてくださり、また、マスメディアの医療専門の方々、医療問題弁護団の先生方をご紹介くださいました。

多くの方々が本書出版に協力してくださいました。

資料、写真を提供してくださった『スイミングマガジン』編集部さん、写真の掲載を了解してくださった北島康介さん、ありがとうございました。

朝日新聞編集委員の出河雅彦さんは病院側の医師との話し合いに同席し助言をくださいました。

共同通信社記者の永澤陽生さんは病院側へ長時間の取材を申し入れ、私たちの思いを配信してくださいました。

日本外科学会指導医H先生、G大学病院I先生、T大学病院研究所T先生からは医学的立場から多くのことを教えていただきました。

原稿執筆の助言から本書制作まで、あけび書房の久保則之代表はじめ、スタッフの皆様に大変お世話になりました。

大勢の方が息子のためにご協力くださり、ありがとうございました。深く御礼申し上げます。

2014年4月　　菅野 雅敏